

## インドネシア・ブトン社会における歴史語りの社会人類学的研究

山口 裕子

一橋大学大学院社会学研究科 特別研究員

### I はじめに — 「歴史の島」ブトン

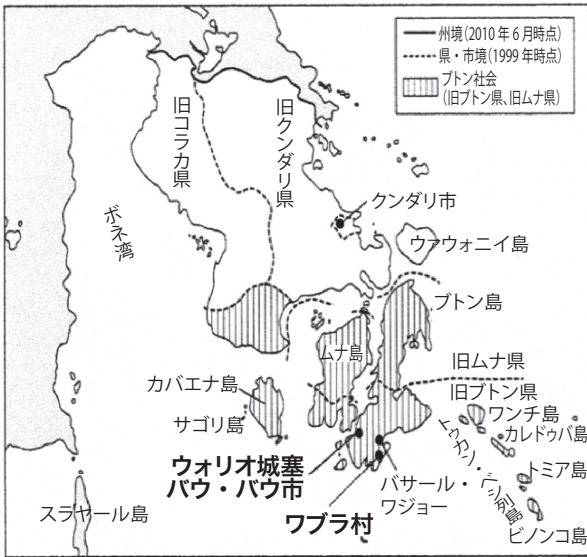
インドネシア東南スラウェシ州に位置するブトン島は、15～17世紀の「大航海時代」の欧文資料には「香料交易の中継地」などとしてごく希に登場する。だが今日のインドネシア国史ではほとんど言及されることがなく、自然資源や産業にも乏しい、国家の中央からみれば歴史、政治、経済的な周辺社会である[地図1]。しかし現地へ赴き、一步踏み込んで人々の生活をみれば、そこには「歴史」が多様な形で織り込まれており、その意味で「歴史の豊かな」社会である。本研究は、人々が語る「歴史」とそれを語る人々の「現在」の両面に着目し、そのいずれもが対照的なブトン島の二つの集落を対象に、日常・非日常の社会生活と不可分な「歴史語り」の複眼的な考察を試みるものである。

対象となるのは、ブトン王国(14世紀ごろ～1960年)の本拠地だった城塞集落ウォリオと、平民の農村ワブラという、それぞれ人口2000人前後の村落社会である[地図2]。

両社会では、それぞれの歴史的歩みを想起させるモノや行事が豊富な生活の時空間で、日常の楽しみとして、また年中儀礼などの機会に盛んに歴史語りがなされる。中心的な話題となるのは、ブトン王国の政治制度やウォリオ城塞が完成する17世紀中ごろまでの出来事である。両社会の知識人は、これらの語りからそれぞれの「正しい歴史」を編纂し、人々が参与する地域政治のコンテキストで、地域内の、あるいは中央政府に対する対抗的な歴史像を提示するなど、政治的实践も行っている。この多様な「歴史」現象の意味を読み解くには、語りを複数の時空間的文脈に定位し、相互に関連付けながら分析する必要がある。本研究ではこれを、次の三点から探求した。1. 各集落の社会生活に歴史語りが埋め込まれ、人々が現在に「歴史を生きて」いる様相の民族誌的記述と分析。2. 語られる「歴史」を相対化するための参照対象としての、16～17世紀の欧文の一次資料などに基づく東部インドネシア海域史とそこでブトン王国の歴史の探求と今日の歴史語りとの照合。3. 両集落



地図1 インドネシアとその周辺の島々



地図2 東南スラウェシ州とウォリオ城塞、ワブラ村

に観察されるアイデンティティの政治としての歴史語りの実践の分析。

これらを通して人間の生にとって歴史を語り表現することの多面的な意味を考究し、複数の文化圏や生態空間の境界域に位置するブトン社会の文化・社会的特徴を解明することを目指した。

## II 人間の生と歴史の多元的理解を目指して—主な成果

### 1. 生の時空間に埋め込まれた「歴史」

ウォリオ城塞は、その規模（周囲約2.7km）と構造において東南アジアでも他に類をみず、居住地として機能している点でも希有な例である [写真1]。本研究では、城塞内に多数点在する王国時代の墓、岩などの「歴

史の標し」との接触を一つの契機に日常の雑談で繰り出される豊富な歴史語りを、比較地域的視座を交えて民族誌的に記述・分析した [写真2]。その結果、a. 東南アジアに広く観察される「銀河政体」的王国観、b. 王族の出自を13世紀末にジャワに侵攻した元軍のフビライ汗に辿る、「イスカンダール伝説」と同種の外来起源譚、c. 『『多様性の中の統一』(共和国の国是)を400年前に達成した偉大なブトン王国』の反復と強調にみられるポスト・スハルト期（1998年～）インドネシアの民主化・地方分権化政策に呼応した地域の文化的自己主張などの特徴が明らかになった。



写真2 ウォリオ城塞内部：「歴史の標し」が豊富に存在する

平民の農村ワブラの探求からは、a. 一年を周期とする農事暦儀礼によって分節された社会生活、b. その中の巡礼儀礼では、ワブラ村をブトン王国の起源地かつ模範的中心とする独自のブトン王国史——ワブラ人曰く「真実の歴史」——が伝承されている。c. 儀礼の実践を通して、ワブラ人は歴史的歩みと村の位階的秩序を、一年周期で



写真1 パウ・パウ市を眼下に望む堅固なウォリオ城塞

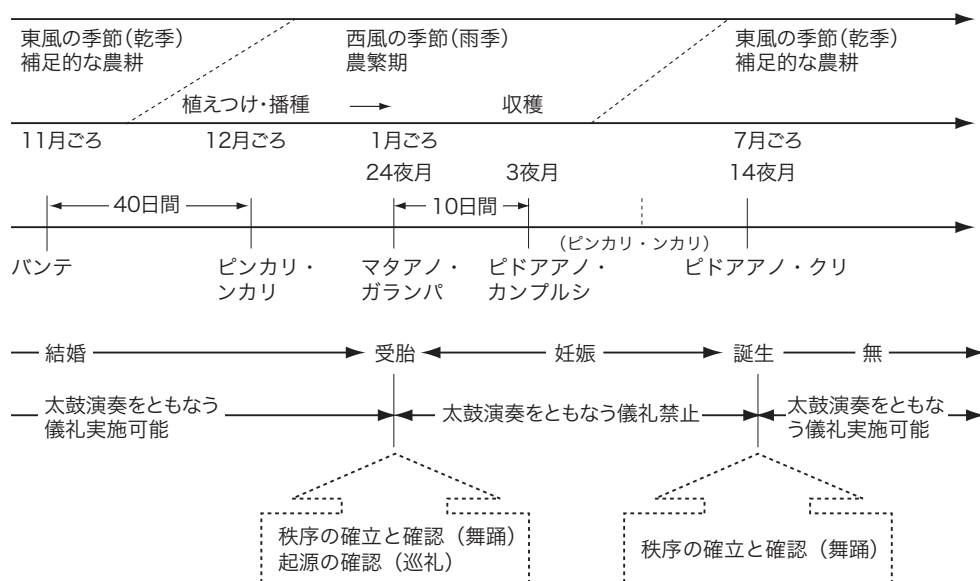


図 ワブラ村の一年：農事暦儀礼をととして位階的秩序と歴史が再演・再確認される



“中国語”が記された「約束の岩」  
 年長者：我々の祖先が中国（モンゴル）からやってきた証拠だよ。

写真3 巡礼路には「歴史の証拠」が点在する

繰り返し再現し再確認していることなどが明らかになった [図、写真3]。

## 2. 文字資料にみるインドネシア東部海域における初期ブトン王国史の探求

欧文、インドネシア語、ブトン（ウォリオ）語資料などを可能な限り網羅的に渉猟し、「より洗練された実証主義」の観点から検討することによって、17世紀中ごろまでのブトン王国の歴史過程を再構成した。その結果、a. ブトンの名が登場する最古の文字資料の一つ、『ナーガラ・クルターガマ』によると、14世紀ごろのブトン地域にはマジャパヒト王国に朝貢する政体があった

[Pigeaud 1960 III: 17]。b. 16世紀中葉にポルトガル人が記録した「ピクサガラ神話」では、ブトンは香料の産地だったマルク諸島のテルナテ王国を「父」とする「子」として描かれ [Andaya 1993; 生田 1998]、c. 17世紀中ごろまでのブトン王国は、イギリス、オランダ、およびマルク諸島や南スラウェシの諸勢力間の香料獲得をめぐる競争において、海上交通の中継地として注目され政治的干渉を受けた。その中でオランダ東インド会社とテルナテ王国の連合と条約締結を繰り返しながら、南スラウェシの港市マカッサルからの圧力に抗してかろうじて独立を保ったことなどが明らかになった [e.g. Heeres (ed.) 1907, 1930; 山口 2011: 95-123]。

他方でこの探求からは、今日のウォリオ人やワブラ人の歴史語りを直接裏書きするような情報は殆ど得られなかった。そこで、今日の歴史語りが示唆するもう一つの方向性、すなわち現在の政治的メッセージ性について、実地調査と文献研究に基づき以下に探求した。

### 3. アイデンティティの政治としての分析

日常生活における歴史語りをくみ上げて、ウォリオ人エリートは新州設立運動や文化観光開発に絡めてブトン王国史を提示し、ワブラ人は自らをブトン王国の起源地とする「真実の歴史」でウォリオに対抗しようとしている。これらのアイデンティティの政治に関連する文脈として、①インドネシア中央の民主化と地方分権化政策を受けて「慣習復興」が進むスラウェシ地方政治の「現在」、②その「現在」の背景であるオランダ植民地期以降の中央とスラウェシ地域との関係史、スラウェシ地域内の民族間関係史、ブトン地域内の位階制の変遷を探求した。ここからは、a. 植民地期から共和国独立期を通して、ウォリオ人王族貴族が現地人官吏や地方政府の要職に就き、スハルト期の国民統合政策においては、ウォリオの歴史や文化がブトン地域を代表するものとしてオーソライズされた。b. 東南スラウェシ地域一帯において、王国時代から中心的な位置づけにあったブトンは、1960年代の東南スラウェシ州成立時の陸域部への州都移転に伴って地域内での行政上の中心的地位を喪失した。c. なかなく平民ワブラ社会は一貫してブトンの周辺部として、国家中央からみれば幾重にも重層的な周辺性を生きてきたことが明らかになった。

### 4. 歴史言説の対話空間の創造過程としての分析

以上の考察を統合し、ウォリオとワブラの語りの実践を、それぞれに複数の「聞き手」を想定し歴史言説が交換される「歴史言説の対話空間」の創造過程としてとらえ、上に探求した近現代のブトン地域の政治史と関連させて分析した。その結果、a. ウォリオ社会が中央政府の民主化、地方分権化政策にตอบสนองし、その歴史言説をブトン社会内外に向けて発信するに伴って、それが流通し交換される複数の「歴史言説の対話空間」が創造されている。その結果、同心円状の対話空間ブトンにおけるウォリオの中心性が高揚している。b. そのため、ワブラではウォリオ人に対するルサンチマンを意識して、より直接的な聞き手とする対抗的な「真実の歴史」の語りが村落生活において興隆している。以上のような今日の階層制と相当程度パラレ

ルな対話空間の様態が明らかになった。

### 5. 歴史の「真実さ」の考究

以上の探求を経て到達したのは、ウォリオとワブラにおいて「実証性」が必ずしも担保されず、一見荒唐無稽な内容を含む歴史語りであっても、それぞれの社会で「真実」として語られ続けるのはいかにしてかという問いである。本研究ではその答えを、歴史語りを一部とするそれぞれの生活の時空間の中に求めた。そこから明らかになったのは、「洗練された実証主義」でも「相対主義的探求」でも十分には説明できない、「歴史を語り生きること」によってその「真実さ」を実感するような、人間の生と歴史との関わり方であった。

### Ⅲ 歴史語りの人類学—本研究の特徴と意義

歴史学および人類学では、歴史記述を過去の「史実」の再現とみる古典的な実証主義と、歴史が記述された同時代の政治的レトリックに還元して解釈する相対主義との理論的対立を通して、近年ではポストモダンの本質主義批判を背景に「より洗練された実証主義」の記述方法に到達し、資料が包含するレトリックや政治性にも対処してきている。しかし対立そのものが乗り越えられたとはいえなかった。本研究では「より洗練された実証主義」の方法に加えて、「現在」の視点から歴史語りを文脈化・相対化する方法を用いて、多様な資料群を多角的に分析した。それにより実証主義と相対主義の双方を方法的に可能な限り満たした上で、さらにそれらでは説明できない、社会と関わる「歴史」の存在を探求し、「人間にとって歴史（を語ること）の意義」というより広い見地から「実証」概念を再定位することで、上述の対立を実践的に乗り越える視点を提示した。

また本研究で対象としたのは、インタビュー空間において収集した個人的な過去の体験的出来事の回想ではなく、個人のライフ・スパンを超えた時間的深さをもつ歴史語りである。その分析においては口述資料を過去の歴史探求に活用するオーラル・ヒストリーの方法を参考にしつつも、ここではさらに歴史を語る主体の現在の社会生活の時空間、そしてその現在を成り立たせる複数の時空間コンテクストの詳細な探求を行った。それにより、歴史実践を、それがなされる人間の生そのものを視野に、よりトータルな視点から考究する対話的・弁証法的な「歴史」研究を目指した。

本研究の特徴はまた、「言説空間論」と言語コミュニケー

ション論を発展させ、歴史言説を通じた対話空間の創造過程として歴史語りを分析する方法にある。ある歴史語りを、それが語られる文脈に照らして解釈する近年の相対主義的試みにおいて、しばしば忘れられてしまう単純なしかし重要な事実は、語りがなされる「現在」という文脈そのものが複数の過去の累積からなり、語りが向けられる対象（聞き手）が多様であり得るということである。本研究では、語りと語り手の現状との相関性を指摘するのみならず、語りの文脈および想定する聞き手の複数性を、植民地期以降の近現代におけるブトン社会の位階制形成史や民族間関係史、および現代の「慣習復興」を背景に階層を超えた「ブトン人アイデンティティ」が興隆するダイナミクスと関連させ、通時的視点から明らかにした。

以上を通して、本研究では国家における幾重にも周辺の小地域民族社会ブトンが、地域政治を媒介として国家中央と対話し歴史語りを展開する動態を克明にとらえた。本研究は、インドネシアのような新興多民族国家における周辺社会の歴史実践について、一つの具体的なモデルを提供すると考える。

#### IV 課題と展望

今後は人類学、歴史学、政治学、社会言語学をはじめとする国内外の学問諸領域の学術論文のみならず、広範な社会に向けた論説の形でも広く成果を提供し、歴史と人間、インドネシアおよび東南アジア研究などをめぐる学際的な議論をさらに深化、発展させたい。

本研究はなにより、現地調査におけるブトンの人々との共働によって可能になった。当初ブトンの文化と歴史の学び手だった私は、やがて調査地社会の人々から歴史語りの「真実さ」を承認し歴史を書くことを要請され、

深くその実践へと取り込まれて行った〔山口 2011: 第5章参照〕。本研究は現地調査の過程でブトン社会から受けたこうした文化的貢献の要請に応えようとするものでもある。したがって今後は国内外の学会はもとより、ブトン社会へ研究成果をフィード・バックし、その結果を再度研究へ反映させて行きたい。それによって学界および調査地社会をも含む真に対話的な研究を進めたい。

#### 謝 辞

この度、公益財団法人三島海雲記念財団には「第1回三島海雲学術特別賞」という大変栄誉ある賞をいただきましたことに心より御礼申し上げます。また大学院生時代より今日までご指導をいただいている清水昭俊先生をはじめとする先生方、いつも知的な刺激をくださる学友の皆さまに改めて感謝申し上げるとともに、今後とも変わらぬご指導と忌憚のないご批評をお願いいたします。

#### 参考文献

- 1) Andaya, L. Y. : *The Heritage of Arung Palakka: A History of South Sulawesi (Celebes) in the Seventeenth Century*. The Hague: Nijhoff, 1993.
- 2) Heeres (ed.) : *Corpus Diplomaticum Neerlandico-Indicum*. Deel I, II. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff, 1907-1930.
- 3) 生田 滋 : 『大航海時代とモルッカ諸島——ポルトガル、スペイン、テルナテ王国と丁字貿易』中央公論社、1998。
- 4) Pigeaud, G. Th. : *Java in the 14th Century: A Study in Cultural History: The Nāgara-Kērtāgame by Rakawi Prapañca of Majapahit, 1365A. D.*. The Hague: M. Nijhoff, 1960.
- 5) 山口 裕子 : 『歴史語りの人類学——複数の過去を生きるインドネシア東部の小地域社会』世界思想社、2011。